

VI-5

多発性骨髓腫の治療経過中に骨髓異形成症候群・急性骨髓性白血病を
発症した 4 例の検討

阿部 有、林さやか、森 有紀、中川靖章、鈴木利哉、鈴木憲史

日本赤十字社医療センター血液内科

【目的】悪性腫瘍の治療経過中に急性白血病を合併することが報告されており、その多くは抗癌剤による二次性白血病と考えられている。今回我々は、多発性骨髓腫(MM)の治療経過中に骨髓異形成症候群(MDS)・急性骨髓性白血病(AML)を発症した 4 例を経験したため報告する。

【方法】1998 年から 2006 年の 9 年間で当科において MM と診断し、化学療法による治療経過中に MDS/AML を発症した 4 例について、患者背景、MM の特徴、治療経過、予後について検討した。

【結果】男女差はなく、MM の発症年齢は平均 61.5 歳であり、男性に若年発症の傾向を認めた。MM は IgG, BJ type が 2 例ずつであり、全て 型であった。MDS/AML は RAEB, AML(M4) が 2 例ずつであり、BJ type は MDS を、IgG type は AML(M4)を合併する傾向を認めた。MM の治療として MCNU-VMP が頻回に施行され、melphalan の平均総量は 362mg であった。MM の診断から平均 46 ヶ月後に MDS/AML を発症しており、比較的早期(平均 6.5 ヶ月)に全例が死亡した。

【結論】MM の治療経過中に発症した MDS/AML は治療抵抗性であり、予後は不良である。MM に対する化学療法にはアルキル化剤が用いられてきたが、二次性白血病の発症のリスクも考慮する必要があると考える。